

論文の要旨

論文題目	二字漢字語のデータベースによる動詞化と形容詞化の 日韓対照研究
氏名	朴 善嫻
学位	博士 (学術)
授与年月日	平成26年3月25日

本研究では、日本語と韓国語に存在する2字漢字語に着目し、両言語における同形漢字語に付加される語尾を集計した上で、計量的検討を行った。さらに、日本語と韓国語の同形語だけではなく、一方の言語のみに存在している漢字語も検討に入れ、それらの漢字語に付加する語尾の情報もデータ化した。それから、両言語間の2字漢字語の形態的特徴の比較対照を可能とするデータベースを作成した。

第1章では、日韓両言語間の類似性のうち語彙的類似性は非常に高く、両方とも自国語の語種の中で漢字語が半数以上を占めていることを記述した。韓国語のうち漢字語が使われている場面や、韓国での漢字語の使用を本研究の背景として述べ、韓国語における漢字語の位相・漢字文化の背景・学校教育における漢字政策の状況を記述した。それにより、韓国語に内在している漢字語の使用現況が確認できた。両言語で多用されている2字漢字語の類似性や、漢字語に関わる語尾における形態的な類似性や相違性に着目し、本研究の成り立ちや日韓両言語における2字漢字語のデータベースの作成について述べた。

第2章では、韓国語の漢字語に関する先行研究を概観し、本研究の位置づけを行った。韓国語における漢字語の起源を探り、その漢字語が韓国語の固有語に同化され使用し続けている語彙性特徴の検討を行った。また、語根として使われる2字漢字語に付加する語尾について先行研究を検討した。漢字語に付加される語尾において、動詞性・形容詞性を有している2字漢字語に関する語根のメカニズムを分析した研究を含め、それに付加される接尾辞の *-hada* や *-doeda*、「-的」の拡張した使用について検討した。それにより、漢字語が韓国語の言語体系に同化され、固有語との融合により成立していることが確認でき、これで、日韓両言語の漢字語における比較対照の根拠に成り立ち、両言語の2字漢字語をデータベース化することに意義があるということを確認した。

第3章では、韓国語の2字漢字語に *-hada* が付加することで動詞あるいは形容詞となるか、語彙性アスペクト特性を検討した。韓国語の *-hada* は日本語の *-suru* に対応しているが、韓国語 *-hada* は、動詞と形容詞の両方に使われるため、形態上ではその違いを判定することはできない。日本語2字漢字語の *-suru* 付加研究(松岡・玉岡・酒井, 2009; Tamaoka, Matsuoka, Sakai & Makioka, 2005) では、使用頻度の高い2,000語の漢字語の持つ「開始」「継続」「終結」「状態」の4つアスペクトから *-suru* 付加を予測し、「終結」のアスペクトだけで93.64%

(802 語中 751 語) を予測できることを示した。そこで、韓国語漢字語でも、語彙の持つ 4 種類の動作性アスペクトによって、動詞および形容詞としての *-hada* 付加を予測し、日本語の場合と比較することにした。韓国語のナショナルコーパスとされる『21 世紀世宗計画』を基にして使用頻度の高い 2,000 語の漢字語を抽出した。これらの 2,000 語の総延べ頻度は 1,481,916 語で、コーパスの総語彙延べ頻度の 26,329,643 語に占める割合は 5.63% である。また、コーパス全体の名詞の総延べ頻度は 5,137,556 語であり、それに占める割合は 28.84% である。『標準国語大辞典』を使用し、これら 2,000 語に *-hada* が付加されるかどうかを調べた。また、2,000 語について 4 つのアスペクトの有無を判断した。アスペクトの判断に関しては、著者がすべて判断したが、信頼性を測定するためにランダムに 200 語を選び、韓国語母語話者に判定を依頼した。評定者間信頼係数（ピアソンの相関係数、 $n=200$ ）は、開始が 0.871、継続が 0.827、終結が 0.868、状態が 0.815 で、すべてのアスペクトで 0.800 を超えており、信頼性の高いことを確認した。

2,000 語の韓国語の漢字語について *-hada* が付くかどうかを 4 種類のアスペクト（アスペクトが有る場合は 1、無い場合は 0）と使用頻度で予測する二項ロジスティック回帰分析を行った。動詞の分析の結果(Nagelkerke $R^2=0.768$)、「開始」($p<0.01$)、「継続」($p<0.001$)、「終結」($p<0.001$)、「状態」($p<0.001$)のすべてのアスペクトが有意な予測変数となった。しかし、使用頻度($p=859$, *n.s.*) は有意ではなかった。アスペクトの中で、最も高い予測力を示したのは「終結」のアスペクト(Wald=380.562)で、全動詞の 843 語の内 687 語を 81.50% 予測した。次に、「状態」のアスペクト(Wald=120.992)であり、253 語を予測し 30.01% であった。「開始」および「継続」も有意な予測変数ではあるが、いずれも多くが「終結」のアスペクトと重複するため、予測力は弱かった。形容詞の分析の結果(Nagelkerke $R^2=0.399$)、「終結」($p<0.01$)と「状態」($p<0.001$)のアスペクトが有意な予測変数となり、「開始」($p=0.728$, *n.s.*)、「継続」($p<0.075$, *n.s.*)および使用頻度($p=717$, *n.s.*) は有意ではなかった。「状態」のアスペクト(Wald=97.043)だけで、86 語の内 78 語の 90.70% を予測した。

結論として、「終結」のアスペクトの有無で動詞としての *-hada* 付加が 81.50% 決まる。つまり、「±終結」が韓国語漢字語の *-hada* 付加による動詞化を決めていると言えよう。一方、「状態」のアスペクトの有無で形容詞としての *-hada* 付加が、90.70% が決まる。従って、「±状態」が韓国語漢字語の *-hada* 付加による動詞化を決めている。ただし、2,000 語の内、「状態」のアスペクトを持つ漢字語は 386 語あり、この中で 86 語の内 78 語を予測するので、20.21% の予測である。つまり、漢字語が「状態」のアスペクトを持っても、79.79% は形容詞としての *-hada* が付加されない。「状態」のアスペクトを持つからといってすぐに形容詞とはならない。以上のように、韓国語漢字語の動詞としての *-hada* 付加は、日本語の *-suru* 付加と同様に（松岡ら, 2009; Tamaoka et al., 2005）、「±終結」の特性で決まっていた。また、形容詞としての *-hada* 付加は、「±状態」の特性で決っている。使用頻度は、動詞および形容詞としての *-hada* 付加を予測しないので、漢字語としての頻度そのものは *-hada* 付加に関係しないことが明らかになった。

第4章では、日本語と韓国語に共通する2字漢字語の統語的形態における類似性と相違性を計量的に検討した。2字漢字語の中でもある特定の語尾が付加されることにより、名詞が動詞化または形容詞化する語で日韓ずれがある語があり、日韓両言語で動詞になる語でも、その漢字語が能動態か受動態かにより、日韓でずれが生じる語がある。また、形容詞の性質を持つ接尾辞「-的」の付加も調査対象とし、「-的」の出現傾向も検討した。その結果、調査対象語の1,872語のうち動詞は、日本語は609語(32.5%)で、韓国語は631語(33.7%)であった。一方、形容詞は、日本語は169語(9.0%)で、韓国語は127語(6.8%)であった。動詞と形容詞の両品詞を持っているのは、日本語は26語、韓国語は11語であった。また、動詞に関しては韓国語では受動態と能動態を分けて集計した。その結果、*-doeda*が付加可能なのは、631語のうち318語(50.4%)であった。これらの日韓両言語に現れる統語的形態の違いを明らかにすることで、母語からの干渉が起こりやすい語彙とその特徴を挙げることにより、日本語学習をより効率的に進められるものとする。

第5章では、本研究での最終的な目的とする「日韓2字漢字語データベース」について、漢字語の抽出からデータベースの作成の過程や結果を述べた。データベースは3つの資料に分けて作成し、さらに漢字語の情報別に細分化した。

「資料Ⅰ」には、5つの〔シート〕を設け、〔シート1〕では日本語能力の中級のレベルに相当する語彙のうち2字漢字語の品詞情報が得られるようにした。〔シート2〕には日韓同形語の1,872語に対し、日本語と韓国語の品詞の情報が比較できるように載せた。〔シート3〕には、韓国語には存在しない日本語独自の188語に対して品詞情報が参考できるように載せた。〔シート4〕では日韓同形語で動詞や形容詞においてずれがある漢字語の項目を確認できる。〔シート5〕では日韓同形語の1,872語のうち日本語と韓国語の形容詞を比較できるようにした。「資料Ⅰ」を通して、日本語のレベルが上がるにつれ日韓での同形語の語数は、急増することが分かった。

「資料Ⅱ」では、3つの〔シート〕を設け、〔シート1〕には日本語能力上級レベルに相当する語彙の3,698語を抽出し、その品詞情報と語尾の付加可否が得られるようにした。〔シート2〕には3,698語のうち、日韓同形語3,419語の日本語の品詞と韓国語の品詞を対応させて比較できるように並べた。〔シート3〕は3,698語のうち韓国語には存在しない漢字語を分け、その特徴や傾向が分かるようリスト化したものである。「資料Ⅱ」では、日本語の語彙学習における基本的な2字漢字語の品詞性が確認できるようにした。さらに、韓国語母語話者にとっては学習言語と母語との関係が明確に比較できるようにした。「資料Ⅱ」を通じて、中級レベルから上級レベルに上がるにつれ、2字漢字語の語数そのものは増えていない(2級:1,666語、1級:1,638語)が、動詞として*-suru*が付加される語は増えていることが分かった(2級:534語/1,666語、1級:691語/1,638語)。

「資料Ⅲ」では、4つの〔シート〕を設け、〔シート1〕には韓国語の高使用頻度2,000語を抽出し、「*-hada/-doeda/-的*」が付加するかどうかを載せた。〔シート2〕では韓国語の漢字語2,000語に対し、品詞の判別、辞書の記述と2名の母語話者の判定が確認できる。〔シ

ート3]には2,000語のうち日本語にあるかどうかを調べた結果の1,930語の情報を載せた。〔シート4〕には2,000語のうち、日本語には存在しない2字漢字語70語を載せた。「資料Ⅲ」を通して、韓国語の2字漢字語のうち、動詞として使われる語の割合が非常に高いことが分かった(902語/2,000語)。それに比べ、形容詞として使われる語は少なく(103語/2,000語)、「-的」を付加する語が非常に多いことが明らかになった(389語/2,000語)。これらの3つの資料の作成から、日韓同形語における2字漢字語の比較対照を通して類似点や相違点が明確になった。

第6章は総括である。韓国は、表面的にはハングルを使う環境であるが、漢字文化が浸透しており、漢字語は固有語と共に韓国語の語彙体系の中心にある。そこで、日本語と韓国語の2字漢字語に着目し、両言語の類似点や相違点を比較対照研究の視点から明らかにした。特に日本語と韓国語において使用頻度が高い2字漢字語を対象とし、韓国語の2字漢字語の語彙性アスペクトを検討することで、漢字語の品詞性による語尾の予測ができることが明確になった。さらに両言語の2字漢字語の形態的要素を計量的に検討し、日韓間の比較対照の検討を行った。それによって、両言語における2字漢字語の品詞性による語尾のずれや、両言語内の品詞性の特徴が明らかになった。

本研究で明らかに確認できたのは、日本語と韓国語における2字漢字語のうち同形語の割合は90%以上で非常に高かった。しかし、これら漢字語には日本語と韓国語の統語的構造の問題や使用頻度の差が関わっており、比較対照するには多くの制約が存在していた。これらの制約要素が、本研究で提案した日韓2字漢字語データベースの作成を通して明らかになった。

最後に、本研究で試みた両言語における2字漢字語のデータベースの作成には、まだ課題が残っている。まず、同音異義語のうち、データベースに該当する漢字語の抽出や多義語の選択をどこまで取り入れるかを、データ化する目的に沿って客観的な基準を設定する必要がある。次に、漢字語をBCCWJから用例を検索し、データベースに取り入れる場合、洩れた漢字語に関しての特定の指標を設定することが望ましい。最後に、漢字語に内在している語彙的性質による動詞化および形容詞化の予測力を、言語事実に一般化するためには、漢字からなる語構成を考慮する戦略が必要である。漢字語の統語的形態の特徴は、韓国語および日本語の各言語体系の下、特に、各言語の統語現象や言語文化を反映したことによる。言語教育の観点から見れば、学習者に対してその相違点を明示化することがきわめて重要である。

今後は、両言語における言語的特徴を考慮した上で漢字語の特性を、さらに意味的な用法も取り入れるなど対象範囲を広げ、第2言語としての漢字語学習を支援するための基礎データを提供していきたい。本研究で作成した日韓2字漢字語のデータベースが、両言語の教育現場における語彙学習に貢献できることを願っている。